

女子大学生における親準備性の発達 (4)

—2年進学時の養護性について—

岩治 まとか*, 井森 澄江**

(平成 22 年 10 月 7 日受理)

Development of Readiness for Parenthood in Students of a Woman's University (4): Examination of the Nurturance of Students of Just Beginning Their Second Years in the University

IWAJI, Madoka and IMORI, Sumie

(Received on October 7, 2010)

キーワード：女子大学生，親準備性，養護性，学生生活

Key words: Students of a Woman's University, Readiness for Parenthood, Nurturance, Campus Life

要旨

本研究の目的は、大学で学ぶ4年間で、青年女子がどのように「保護される立場」から「保護する立場」に成長していくのか。また、どうやって「保護する立場」に必要な力を身につけていくのかについて明らかにしようとするものである。

調査対象は、大学に入学し1年後の80名の女子大学生である。調査の質問紙は、ソーシャルスキルに関する項目及び養護性に関する項目に加え、大学に入学してからの1年間の生活(勉学、大学内における対人関係、大学外における対人関係、家族との関係)に対する充実度について問う項目からなる。

本報告では、大学入学後1年における養護性の得点について、養護性と学生生活の充実度との関連について検討した。その結果、大学入学時及び2年次への進級時において、個人では変化はみられたものの、養護性の下位尺度得点に変化はみられなかった。養護性と学生生活の充実度との関連では、対人関係や家族との関係の充実度の高さが養護性の高さに関係することが示唆された。特に、家族との関係の充実度が養護性の高さに関係していることが示唆された。しかし、勉学については他の関係とは異なり、ぜんぜん充実していなかった群において養護性が高い傾向が示されていた。

目的

本研究は大学で学ぶ4年間で、青年女子がどのように「保護される立場」から「保護する立場」に成長していくのか。どうやって「保護する立場」に必要な力を身につけていくのかを明らかにしようとするものである。大学に入学した1年生が4年になるまで質問紙調査を実施、その成長を追跡していく。

井森・岩治(2010)、岩治・井森(2010)では大学に入学した直後の女子大学生の親準備性(ソーシャルスキルと養護性)が幼児期、中学高校期の親との関係のあり方、現在のIWMとどのように関連するか。また、養護性とソーシャルスキルがどのように関連しているかについて考察した。その結果、ソーシャルスキルと愛着との関連では、愛着の安定がソーシャルスキルのベースとなっていることが示唆された。養護性と幼児期、中学高校時期、現在の親を中心とした対人関係のあり方との関連では、幼児期の親との関係(就学前の母子関係)と養護性との関連が深いことが示された。また、中学高校時期(IPA)では養護性の中でも特に「親に対するポジティブな感情」と関連が深く、現在の親を中心とした対人関係(IWM)では、ソーシャルスキルとの関連が深いことが示された。なお、養護性とソーシャルスキルには多くの関連が認められ、ソーシャルスキルを高めることと、養護性を高めることが、それぞれのスキルをあげることに繋がることを示唆された。

今回の本報告では、2年生に進級した女子大学生の親準備性(ソーシャルスキルと養護性)が、大学生としての1年間の学生生活(勉学、大学内での対人関係、大学外での対人関係、家族との関係)の充実度と、どのように関連す

* 人文学部教育福祉学科・心理教育学科資料室

** 人文学部教育福祉学科 発達心理研究室

るのか検討していく。報告(4)では、1)大学に入学した直後の女子大学生の養護性と2年生進学時の養護性についてその変化を考察する。2)養護性と学生生活(勉学、大学内での対人関係、大学外での対人関係、家族との関係)の充実度との関連について検討することを目的とする。

方法

- 1) 対象者；首都圏のA女子大学2年生95名(全員この研究の対象者になることに同意) 年齢19～20歳 第1回調査時において1年生に在籍
- 2) 実施時期；2010年4月上旬(第2回調査), 第1回調査2009年4月上旬
- 3) 実施方法；進級時のオリエンテーションの最後に、調査への協力を依頼し、質問紙を配布、その場で回答してもらった(回答時間は20分程度)。第1回調査は入学直後の新入生オリエンテーション時(2009年4月)
- 4) 質問紙の構成；第2回質問紙は、(3)成人用ソーシャルスキル自己評定尺度35項目(相川・藤田,2005), (6)養護性尺度63項目(岩治2004)に加えて、大学に入って1年間の大学生活について、勉学に対する充実度および大学内での対人関係充実度、大学外での対人関係充実度、家族との関係に対する充実度についての自己評定(4段階評価；1. ぜんぜん充実していなかった～4とても充実していた)とその理由。さらに「大学生という時代において何を一番大切にしたいか」「2年生としての抱負」についての自由記述からなる。

第1回質問紙は、フェイスシート(学籍番号, 年齢, 家族構成, 育った環境, 母親の就労状況, 年下の子どもの世話経験など), (1)文章完成を求める項目, (2)Q U尺度中学生用9項目(配慮尺度4項目, かかわり尺度5項目), (3)成人用ソーシャルスキル自己評定尺度(相川・藤田,2005), (4) I P A尺度(井上ら,2006), (5)成人愛着内的ワーキングモデル尺度(戸田・琢磨,1988), 就学前の母子関係尺度9項目(酒井2001)(就学前の安定的な母子関係3項目, 就学前の拒否的な母子関係3項目, 就学前のアンビバレントな母子関係3項目), (6)養護性尺度(岩治2004)からなる。(2)(3)(4)(5)(6)は4段階評価(1. 全くそう思わない～4. 非常にそう思う)を用いた。

結果と考察

本報告では、第2回調査の質問紙にすべて回答していた80名を分析対象者とした。

1. 大学入学後1年間の養護性尺度得点の変化

2年生進級時点(2010.4)における養護性の各下位尺度得点の平均値を、前回大学入学時(2009.4)の値と比較できるように、Table1に示す。なお、養護性得点については、「将来の子育てに対するネガティブな予測」得点を逆転させて合計し算出している。

まず、前回(2009.4)の研究で得られた下位尺度得点は、「子ども・赤ちゃんへの関心(赤ちゃんを見ても別にかわいいとは感じない。幼児の相手をうまくやれると思う。他15項目)：52.58」「親に対するポジティブな感情(自分の母親のようにになりたい。現在の自分に満足している。他8項目)：29.63」「親になることへの積極的志向(将来、親になった時のことを想像することがある。将来、子どもと遊んでいる自分の姿を想像する。他3項目：15.74)」「奉仕的な志向(人の世話に好きである。人からよく「世話好き」であると言われる。他3項目：14.29)」「将来の子育てに対するネガティブな予測(将来、子育てに悪戦苦闘している自分の姿を想像する。将来、毎日生活に疲れ果て、イライラしている自分を想像する。他2項目：9.73)」「動植物への関心(動物を飼うことに興味が無い。草花を育てることに興味がある。他3項目：13.03)」であり、2005年の研究(大学、大学院、医療系専門学校の男女学生387名、有効回答数：男子学生170名、女子学生161名の計331名)で得られた女子学生の得点よりも、「親に対するポジティブな感情」と「動植物への関心」において多少低い傾向が示されたが、その他の尺度得点では2005年を上回る得点が得られ、大学に入学した直後の養護性は高い傾向にあった。また、人の援助に関わる学問領域を専攻していることから、特に奉仕的な志向が高い傾向が示されていた。

今回得られた下位尺度得点は、「子ども赤ちゃんへの関心：52.34」「親に対するポジティブな感情：30.15」「親になることへの積極的志向：16.29」「奉仕的な志向：14.39)」「将来の子育てに対するネガティブな予測：10.03)」「動植物への関心：13.15)」であり、前回の大学入学時から比較

Table 1 養護性尺度の下位尺度平均値

	2010.4((SD)	2009.4((SD)
子ども・赤ちゃんへの関心	52.34(7.01)	52.58(7.34)
親に対するポジティブな感情	30.15(4.82)	29.63(4.63)
親になることへの積極的志向	16.29(3.41)	15.74(3.15)
奉仕的な志向	14.39(2.03)	14.29(2.06)
将来の子育てに対するネガティブな予測	10.03(2.14)	9.73(2.33)
動植物への関心	13.15(1.80)	13.03(2.09)
養護性(ネガティブな予測逆)	136.28(14.87)	135.38(13.95)

して2年生への進級時において、下位尺度得点および養護性得点に差はみられなかった。ただし、「子ども・赤ちゃんへの関心」を除く、他の下位尺度得点において若干の高まりがみられた。このことは、今回使用している養護性尺度の安定性によるもので、尺度の信頼性を意味していると考えられる。

なお、各下位尺度の項目数で除して求めた各尺度得点は、「子ども赤ちゃんへの関心：3.08」「親に対するポジティブな感情：3.02」「親になることへの積極的志向：3.26」「奉仕的な志向：2.88」「将来の子育てに対するネガティブな予測：2.51」「動植物への関心：2.63」「養護性：2.96」であった。

2. 1年間の大学での勉学充実度、対人関係充実度、家族関係充実度の自己評価と養護性

1) 勉学に対する充実度と養護性について

「1 ぜんぜん充実していなかった」「2 あまり充実していなかった」「3 まあまあ充実していた」「4 とても充実していた」がそれぞれ、5人、22人、37人、16人であり、66%以上の学生の、勉学に対する充実度が伺えた。

また、勉学に対する充実度によって、養護性の各下位尺度得点に違いがあるかをみるために、最も高い4（とても充実していた）～最も低い1（ぜんぜん充実していなかった）と答えた各群の、養護性項目得点について平均値の差の検定を行った。

その結果（Table 2）、充実度の違いによる養護性の下位尺度得点に有意な差はみられなかった。

また、「子ども赤ちゃんへの関心」では、1 ぜんぜん充実していなかった群 53.60、2 あまり充実していなかった群 50.45、3 まあまあ充実していた群 53.16、4 とても充実していた群 52.63 で、「1 ぜんぜん充実していなかった」群の得点が一番高かった。同様に、「親に対するポジティブな感情」「親になることへの積極的志向」についても、「1 ぜんぜん充実していなかった」群の得点が一番高く、さらに「養護性」尺度においても「1 ぜんぜん充実していなかった」群の得点が、一番高い得点を示していた。なお、「親

になることへの積極的志向」においては有意傾向が示された（ $p < .10$ ）。

しかし、「将来の子育てに対するネガティブな予測」では、2 あまり充実していなかった群 10.36、1 ぜんぜん充実していなかった群 10.20、3 まあまあ充実していた群 10.02、4 とても充実していた群 9.56 であり、4 とても充実していた群の得点は低かった。

また、「奉仕的な志向」については、4 とても充実していた群の得点が一番高く、続いて3群、2群、1群の順で得点が示された。このことは、対象学生が福祉や教育といった人の援助に関わる学問領域を専攻していることから、これらの興味ある分野を勉強したことが勉学の充実度に結びつき、奉仕的な志向得点の高さに関連したと示唆される。

勉学に対する充実度と養護性との関連については、「1 ぜんぜん充実していなかった」群の得点が高かった。この結果は、勉学の充実度と養護性との関係の最大の特徴であるが、「将来の子育てに対するネガティブな予測」の得点において、2 あまり充実していなかった群に続いて、1 ぜんぜん充実していなかった群の得点が高かった。このことから、将来実際に親になることや、親になり子育てをするといったことに対する具体的な展望については、勉学充実群の方が現実的であり柔軟である可能性が示唆される。よって今後、「将来の子育てに対するネガティブな予測」が勉学の充実度とどのように関係するかについて、引き続き検討を行う必要があると考えられる。

2) 大学内での対人関係充実度と養護性について

「2 あまり充実していなかった」11人、「3 まあまあ充実していた」28人、「4 とても充実していた」が41人であり、半数以上の学生が「4 とても充実していた」と回答し、「1 ぜんぜん充実していなかった」と回答した学生はいなかった。

また、大学内での対人関係に対する充実度によって、養護性の各下位尺度得点に違いがあるかをみるため、充実度3群（1 ぜんぜん充実していなかった群がないため）に

Table 2 勉学に対する充実度の自己評定と養護性

		子ども・赤ちゃんへの関心	親に対するポジティブな感情	親になることへの積極的志向	奉仕的な志向	将来の子育てに対するネガティブな予測	動植物への関心	養護性(ネガティブな予測逆)	
勉学	1.ぜんぜん	5	53.60	32.80	18.20	13.40	10.20	12.40	140.20
	2.あまり	22	50.45	28.86	14.91	13.82	10.37	12.82	130.50
	3.まあまあ	37	53.16	30.08	16.49	14.68	10.02	13.27	137.65
	4.とても	16	52.63	31.25	17.13	17.13	9.56	13.56	139.81
	値		.76	1.32	2.19	1.48	.44	.87	1.67
	有意確率		.52	.27	.09	.23	.73	.46	1.8
	群間比較								

よる養護性項目得点についての平均値差の検定を行った。

その結果 (Table 3), 「親になることへの積極的志向」の得点において, 4とても充実していた群が有意に高い得点を示した ($F(2,77)=5.57, p<.01$). また Tukey 法による多重比較の結果, 「2あまり充実していなかった群」と「4とても充実していた群」, 「3まあまあ充実していた群」と「4とても充実していた群」において, 有意な差がみられた。また, 「奉仕的な志向」についても, 4とても充実していた群の得点が有意に高く ($F(2,77)=10.13, p<.001$), 「2あまり充実していなかった群」と「3とても充実していた群」, 「2まあまあ充実していた群」と「4とても充実していた群」において有意な差がみられた。さらに, 「動植物への関心」についても3群による有意な差がみられ, 「2あまり充実していなかった群」と「3とても充実していた群」の間に有意な差が示された ($F(2,77)=3.33, p<.05$). なお, 「養護性」の得点については, 4とても充実していた群が有意に高い得点を示した ($F(2,77)=5.31, p<.01$). また Tukey 法による多重比較の結果, 「2あまり充実していなかった群」と「4とても充実していた群」との間に有意な差がみられた。

大学内での対人関係の充実度と養護性との関連については, 養護性下位尺度得点の傾向として「4とても充実していた」群の得点が, 動植物への関心を除く全ての尺度にお

いて一番高い得点であり, 次いで3まあまあ充実していた群, 2あまり充実していなかった群と続いていた。また, 「将来の子育てに対するネガティブな予測」についても, 4とても充実していた群の得点が一番低く, 2群, 3群の順で得点が示された。このように, 学内での対人関係の充実度が高いほど, 養護性が高いという結果が示された。

また, 大学内での対人関係の充実度が「親になることへの積極的志向」や「奉仕的な志向」と関連することが示唆され, 学内での対人関係の充実度が高いほど, 養護性も高まることが示唆された。

3) 大学外における対人関係充実度と養護性について

「1ぜんぜん充実していなかった」「2あまり充実していなかった」「3まあまあ充実していた」「4とても充実していた」がそれぞれ, 6人, 7人, 27人, 40人であり, 半数以上の学生が「4とても充実していた」と回答し, また83%以上の学生が学外での対人関係に充実感を覚えていることが示された。

大学外における対人関係充実度によって, 養護性の各下位尺度得点に違いがあるかをみるために, 「4とても充実していた」から「1ぜんぜん充実していなかった」と答えた4群の, 養護性の下位尺度得点について平均値の差の検定を行った。

Table 3 大学内での対人関係に対する充実度の自己評定と養護性

		子ども・赤 ちゃんへの 関心	親に対する ポジティブ な感情	親になること への積極的 志向	奉仕的な志向	将来の子育て に対するネガ ティブな予測	動植物への 関心	養護性(ネガ ティブな予 測逆)	
学内における対人関係	1.ぜんぜん	0	—	—	—	—	—	—	
	2.あまり	11	48.27	28.00	14.55	12.18	10.09	12.00	
	3.まあまあ	28	52.46	29.64	15.29	14.39	10.46	13.61	
	4.とても	41	53.34	31.07	17.44	14.98	9.73	13.15	
	値		2.35	2.05	5.57	10.13	.98	3.31	5.31
	有意確率		.102	.135	.005**	.000***	.380	.041*	.007**
	群間比較				2<4*	2<3*		2<3*	2<4*
					3<4*	2<4*			
							p<.05*	p<.01**	p<.001***

Table 4 大学外での対人関係に対する充実度の自己評定と養護性

		子ども・赤 ちゃんへの 関心	親に対する ポジティブ な感情	親になること への積極的 志向	奉仕的な志向	将来の子育て に対するネガ ティブな予測	動植物への 関心	養護性(ネガ ティブな予 測逆)	
学外における対人関係	1.ぜんぜん	6	43.33	28.17	12.17	13.17	11.00	14.17	
	2.あまり	7	53.00	27.14	13.86	14.86	10.29	13.00	
	3.まあまあ	27	52.85	30.00	15.74	13.67	10.63	12.89	
	4.とても	40	53.23	31.08	7.70	14.98	9.45	13.20	
	値		3.98	1.80	8.54	3.39	2.24	.85	4.47
	有意確率		.011**	.155	.000***	.022*	.091	.472	.006**
	群間比較		1<3*		1<3*	3<4*			1<4*
			1<4*		1<4*	2<4*			
							p<.05*	p<.01**	p<.001***

その結果（Table 4）、「子ども赤ちゃんへの関心」（ $F(3,76)=3.99, p<.01$ ）、「親になることへの積極的志向」（ $F(3,76)=8.54, p<.001$ ）、「奉仕的な志向」（ $F(3,76)=3.39, p<.05$ ）について、4とても充実していた群の得点が高く有意な差がみられた。また、「養護性」においても、4とても充実していた群の得点が有意に高く有意な差がみられた（ $F(3,76)=4.47, p<.01$ ）。

また Tukey 法による多重比較の結果、「子ども赤ちゃんへの関心」では「1 ぜんぜん充実していなかった群」と「3 まあまあ充実していた群」、「1 ぜんぜん充実していなかった群」と「4 とても充実していた群」の間に有意な差がみられた。「親になることへの積極的志向」においては、「1 ぜんぜん充実していなかった群」と「3 まあまあ充実していた群」、「1 ぜんぜん充実していなかった群」と「4 とても充実していた群」に有意な差がみられ、「奉仕的な志向」では、「3 まあまあ充実していた群」と「4 とても充実していた群」において有意な差がみられた。「養護性」については、「1 ぜんぜん充実していなかった群」と「4 とても充実していた群」の間に有意な差がみられた。

大学外での対人関係の充実度と養護性との関連については、養護性下位尺度得点の傾向として「4とても充実していた」群の得点が、「動植物への関心」を除く全ての尺度において一番高い得点であり、大学内での対人関係充実度と同様の傾向が示された。養護性についても、4とても充実していた群の得点が一番高く、大学外での対人関係の充実度が高いほど養護性が高い結果が示された。

これらのことから、大学外における対人関係の充実度の高さについても、養護性を高める要因になることが示唆された。

4) 家族との関係充実度と養護性について

「1 ぜんぜん充実していなかった」3人、「2あまり充実していなかった」14人、「3まあまあ充実していた」43人、「4とても充実していた」20人であり、「3まあまあ充実

していた」と回答したものが半数を超え、充実群が78%以上であった。

家族との関係充実度によって養護性の各下位尺度得点に違いがあるかをみるために、「4とても充実していた」から「1 ぜんぜん充実していなかった」と答えた4群について、養護性の下位尺度得点における平均値差の検定を行った。

その結果（Table 5）、「子ども赤ちゃんへの関心」（ $F(3,76)=8.82, p<.001$ ）、「親に対するポジティブな感情」（ $F(3,76)=6.64, p<.001$ ）、「親になることへの積極的志向」（ $F(3,76)=4.72, p<.01$ ）について、4とても充実していた群の得点が一番高く有意な差がみられた。また、「将来の子育てに対するネガティブな予測」については、4とても充実していた群の得点が一番低く有意な差が見られた（ $F(3,76)=3.64, p<.05$ ）。また、「養護性」においても、4とても充実していた群の得点が有意に高く有意な差がみられた（ $F(3,76)=10.02, p<.001$ ）。

また Tukey 法による多重比較の結果、「子ども赤ちゃんへの関心」では「1 ぜんぜん充実していなかった群」と「2あまり充実していなかった群」、「1 ぜんぜん充実していなかった群」と「3まあまあ充実していた群」、「1 ぜんぜん充実していなかった群」と「4とても充実していた群」の間に有意な差がみられた。「親に対するポジティブな感情」においては、「1 ぜんぜん充実していなかった群」と「2あまり充実していなかった群」、「1 ぜんぜん充実していなかった群」と「3まあまあ充実していた群」、「1 ぜんぜん充実していなかった群」と「4とても充実していた群」に有意な差がみられた。「親になることへの積極的志向」においては、「1 ぜんぜん充実していなかった群」と「4とても充実していた群」、「3まあまあ充実していた群」と「4とても充実していた群」に有意な差がみられ、「将来の子育てに対するネガティブな予測」では、「1 ぜんぜん充実していなかった群」と「4とても充実していた群」において有意な差がみられた。また「養護性」については「1

Table 5 家族との関係に対する充実度の自己評定と養護性

		子ども・赤ちゃんへの関心	親に対するポジティブな感情	親になることへの積極的志向	奉仕的な志向	将来の子育てに対するネガティブな予測	動植物への関心	養護性(ネガティブな予測逆)	
学外における対人関係	1.ぜんぜん	3	36.33	21.33	12.67	14.33	12.67	104.67	
	2.あまり	14	54.79	29.43	16.64	14.86	9.71	139.71	
	3.まあまあ	43	51.51	29.79	15.51	14.07	10.40	133.42	
	4.とても	20	54.80	32.75	18.25	14.75	9.10	144.75	
	値		8.82	6.64	4.72	.81	3.64	.78	10.02
	有意確率		.000***	.000***	.004**	.49	.017*	.507	.000***
	群間比較		1<2*	1<2*	1<4*		1<4*		1<2*
			1<3*	1<3*	3<4*				1<3*
			1<4*	1<4*					1<4*
									3<4*
						p<.05*	p<.01**	p<.001***	

ぜんぜん充実していなかった群」と「2あまり充実していなかった群」, 「1ぜんぜん充実していなかった群」と「3まあまあ充実していた群」, 「1ぜんぜん充実していなかった群」と「4とても充実していた群」及び「3まあまあ充実していた群」と「4とても充実していた群」との間に有意な差がみられた。

このように、家族との関係の充実度に対する養護性下位尺度得点の傾向として「4とても充実していた」群の得点が、「奉仕的な志向」「動植物への関心」を除く下位尺度において一番高い得点であった。しかし、「2あまり充実していなかった群」の得点が「3まあまあ充実していた群」と同様に、「4とても充実していた群」に次いで高い傾向にあった。

この理由については、一人暮らしによって家族と離れたことや、バイトやサークル、または通学時間の増加等による家族との接触の減少が考えられる。しかし、接触の減少に比して家族との会話等の内容については充実している記述が多く、家族関係については以前と変わらないか、より深い話が出来ようになったなど改善がみられていたことが関連していると考えられる。

これらのことから、家族との関係充実度が「子ども赤ちゃんへの関心」「親に対するポジティブな感情」「親になることへの積極的志向」「将来の子育てに対するネガティブな予測」と養護性の多くの下位尺度と関連することが示された。また「養護性」についても、家族との関係充実度と強く関連することが示された。

まとめ

1. 大学入学後1年間の養護性尺度得点の変化

前回の大学入学時から比較して2年生への進級時において、養護性の下位尺度得点および養護性得点に差はみられなかった。ただし、「子ども・赤ちゃんへの関心」を除く、他の下位尺度得点においては若干の高まりがみられた。このことは、今回使用している養護性尺度の安定性によるもので、尺度の信頼性を意味していると考えられる。

2. 1年間の大学での勉学充実度、対人関係充実度、家族関係充実度の自己評価と養護性

勉学に対する充実度と養護性との関連については、「1ぜんぜん充実していなかった」群の得点が他の群よりも高い傾向が示された。しかし、「将来の子育てに対するネガティブな予測」の得点において、2あまり充実していなかった群に続いて、1ぜんぜん充実していなかった群の得点が高かったことから、将来実際に親になることや、親になり子育てをすることに対する具体的な展望については、勉学充実群の方が現実的であり柔軟である可能性が示唆された。よっ

て今後、「将来の子育てに対するネガティブな予測」が勉学の充実度とどのように関係するかについて、引き続き検討を行う必要があると考えられる。

大学内での対人関係の充実度と養護性との関連については、「4とても充実していた」群の得点が、多くの下位尺度および養護性において一番高い得点であり、学内での対人関係の充実度が高いほど、養護性が高いという結果が示された。また、学内での対人関係の充実度が「親になることへの積極的志向」や「奉仕的な志向」「動植物への関心」と関連することが示唆され、学内での対人関係の充実度が高いほど、養護性も高まることが示唆された。

大学外での対人関係の充実度についても、「4とても充実していた」群の得点が、動植物への関心を除く全ての下位尺度において一番高い得点であり、大学内での対人関係充実度と同様の傾向が示された。また、養護性についても、4とても充実していた群の得点が一番高く、大学外での対人関係の充実度が高いほど養護性が高い結果が示された。

これらのことから、大学内外における対人関係の充実度の高さが、養護性を高める要因になることが示唆された。

家族との関係の充実度と養護性との関連については、「奉仕的な志向」と「動植物への関心」を除く全ての下位尺度および「養護性」において、「4とても充実していた」群の得点が一番高く、家族との関係の充実度が高いほど養護性が高いことが示された。また、家族との関係充実度が「子ども赤ちゃんへの関心」「親に対するポジティブな感情」「親になることへの積極的志向」「将来の子育てに対するネガティブな予測」と養護性の多くの下位尺度と関連することが示唆され、養護性を高める要因であることが示唆された。

これらのことから、家族との関係の充実度の高さが、親になることや養育に対する意識、親に対するポジティブな感情を高める要因となる可能性が示唆される。また、この時期の家族との関係の充実度が養護性にとって重要であることが示唆される。

勉学に対する充実度、大学内の対人関係に対する充実度及び大学外の対人関係に対する充実度、家族との関係に対する充実度の4要因が、養護性と関連する重要な要因であることが示唆された。さらに、今回取り上げたこれらの要因全てに共通して、それぞれの充実度が養護性の特に「親になることへの積極的志向」を高めることが示された。これは、青年期の時期が将来に向けての変化の時期であり、親になる意識の芽生えの時期であることと重なっている。前回の調査では、中学高校時期の親との関係が特に「親に対するポジティブな感情」と関連していることが示され、

中学高校時期にあたる思春期から青年期にかけての時期が、親との関係を振り返る重要な時期であり、また、養護性の獲得においても重要な意味を持つ時期であることが示唆された。今回の調査では、「親に対するポジティブな感情」だけでなく、自分が将来親になることへの意識である、「親になることへの積極的志向」の高まりも示され、養護性の得点には差はみられなかったものの、意識レベルでは親準備性が発達している可能性が示唆された。

今後の課題

本研究では、入学して1年後の女子大学生の親準備性について、ソーシャルスキルと養護性を取り上げ、その変化について検討した。また、大学生としての1年間の生活〈勉学、友人・家族との関係等〉と養護性との関連について検討した。しかし今後、得点の変化だけでなく変化を与えた具体的事象についても検討することが求められる。そのため、本研究の第3回目として、高校時代と現在の学校生活についてや、信頼できる友人関係の有無とその評定等についての調査を実施し現在分析中である。この調査の分析とあわせて、成長や変化に関わる具体的要因の検討を進める必要がある。

付記

本研究の調査に協力して下さいました受講生の諸姉に感謝いたします。

引用・参考文献

- 相川充・藤田正美 2005 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要1部門 56 p87-p93
- 青柳肇・酒井厚 1997 アダルト・アタッチメントと回想による幼児期のアタッチメントとの関係 早稲田大学人間科学研究 第10巻 p7-p16
- Bem,S.C. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology* vol.42 p115-p162
- Erikson,E.H. 小此木啓吾(訳編) 1973 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル 誠信書房 (Erikson,E.H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York: International University Press.)
- Fogel,A.D.&Melson,G.F. マカルピン美鈴(訳) 1989 子どもの養護性の発達 小嶋秀夫(編)乳幼児の社会的な世界 有斐閣 p170-p186 (Fogle,A.D. & Melson,G.F. 1986 *Origins of Nurturance*. Hillsdale, N.J.:Lawrence Erlbaum Associates)

- George, C., & Solomon, J. 1996 Representational Models of Relationships: Links Between Caregiving and Attachment. *Infant Mental Health Journal*. vol.17(3) p198-p216
- George, C.,&Solomon, J. 1999 Attachment and Caregiving. In J. Cassidy & P.R. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment*. Guilford p649-p670
- Hazan, C., & Shaver, P.R. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology* vol. 52(3) p511-p524
- 井森澄江・岩治まとか 2010 女子大学生における親準備性の発達(1)—入学時のソーシャルスキルについて—東京家政大学研究紀要 第50集(1) p143-p149
- 井森澄江・岩治まとか 2010 大学前期の親準備性と学生生活(1)—ソーシャルスキルに焦点をあてて— 第19回日本パーソナリティ心理学会発表論文集
- 井上健治・久保ゆかり(編) 1997 子どもの社会的発達 東京大学出版会
- 井上俊哉・大井京子・西村純一・井森澄江・斉藤こずゑ 2006 親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅱ—PBIとIPAの尺度の再検討— 東京家政大学研究紀要 第46集(1) p245-p251
- 井上義朗・深谷和子 1983 青年の親準備性をめぐって 周産期医学 第13巻 第12号 p2249-p2252
- 伊藤葉子 2003 中・高校生の親準備性の発達 日本家政学会誌 第54巻 第10号 p801-p812
- 岩治まとか 2005 青年期における養護性の検討 東京家政大学大学院文学研究科修士論文
- 岩治まとか・井森澄江 2008 女子青年における"乳幼児期から現在までの親との関係"と"養護性"—回顧法による生育史の分析をもちいて— 東京家政大学附属臨床相談センター紀要 第8集 p19-p35
- 岩治まとか・井森澄江 2010 女子大学生における親準備性の発達(2)—入学時の養護性について— 東京家政大学研究紀要 第50集(1) p151-p158
- 岩治まとか・井森澄江 2010 大学前期の親準備性と学生生活(2)—養護性に焦点をあてて— 第19回日本パーソナリティ心理学会発表論文集
- 数井みゆき 2002 養育システムの発達—愛着システムとの関連についての—考察— 茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学・芸術) 第51号 p45-p63
- 小嶋秀夫・河合優年 1988 乳児・児童における養護性発達に関する心理・生態学的研究 昭和62年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書
- 小嶋秀夫 1991 親となる過程の理解 我妻堯・前原澄子(編) 助産学講座3 母性の心理・社会学 医学書

院 p 89- p 111

中西由里・栗津幹子 1997 「養護性 (nurturance)」に
関する一研究 (2) - 妊婦と未婚学生の比較 - 椋山
女子学園大学女子学園大学研究論集 第 28 号 (社会
科学篇) p 81- p 89

小野寺敦子 2003 親になることによる自己概念の変化
発達心理学研究 第 14 卷 第 2 号 p 180- p 190

酒井厚 2001 青年期の愛着関係と就学前の母子関係 - 内
的作業モデル尺度作成の試み 性格心理学研究 第 9
卷 第 2 号 p 59- p 70

Solomon, J., & George, C. 1996 Defining the Caregiving
System: Toward a Theory of Caregiving *Infant
Mental Health Journal* vol. 17(3) p 183- p 197

詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論からみた青年の対人
態度 - 成人版愛着スタイル尺度作成の試み - 東京都
立大学人文学報 第 196 卷 p 1- p 16

Abstract

The purpose of this study was to determine how adolescent girls will grow up to a “position to be protected” from a “position to protect” in four years studying at the university. And this research examines how to acquire power necessary for “protected standpoint”. The subjects of the study were 80 female university students. The questionnaire, included questions about nurturance, social skills and one-year enhancement level in campus life on a self-rating scale.

The report surveys nurturance of female students just beginning the second year in the university with relation to one-year experience in campus life. It was found that the score on nurturance did not change on the average during one year after the entering of the university. The relation was seen for the enhancement level of interpersonal relationship and nurturance. It was suggested that the height of the enhancement level of family relationships relates to nurturance height. Especially, it was suggested that family relationships deeply relate to nurturance.